
仮面ライダーオーズ 世界の全てを望んだ者

バディムの人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーオーズ 世界の全てを望んだ者

【Nコード】

N7249S

【作者名】

バディムの人

【あらすじ】

鳥のグリード、アंक。

800年の時は彼に様々な変化をもたらした。

しかし彼のすることは変わらない。800年前のあの日からずっと……。

800年前の戦いがアंकの視点より描かれる。

アंकと800年前とファーストコンタクト（前書き）

作者のバディムの人です。

まずこの作品は仮面ライダーオーズの二次創作です。アंकの視点で800年前の戦いが描かれます。

それではお読みください。

アंकと800年前とファーストコンタクト

800年の眠りから覚めた俺を待っていたのは800年前と同じ、グリードとの戦いの日々だった。

もちろん800年前から変わったことも多い。右腕以外の体を失った俺は人間の体を使っている。セルメダルを使うバースとかカンドロイドとかおかしなものもできている。俺の役に立つ変化もあれば邪魔な変化もあった。

まあ、このアイスは間違いなく俺の役に立つ変化だな。何？『メダル集めにはアイスは関係ないだろ』だと？はっ、これだから人間はいいか？この冷たくて美味しいアイスを食べば、俺の頭脳はいい感じで冷え、さらに冴えるんだ！なのに映司のやつと来たら『刑事さんの体に悪い』とか言ってアイスを取り上げようとするから困る。あいつはもつと俺を大事にするべきだ。

まあ、800年前と変わったことは多い。だが基本的に俺のやっていることは昔と変わらない。

オーズと組んで他のグリードのメダルを集める。この目的だけは今も昔も変わっていない。

そう変わっていないんだ。あの頃と。

800年前俺たちグリードは生まれた。俺たちは生まれたばかりの頃、9枚全てのコアメダルを持つ完全体だった。

だが俺たちは何かが足りない気がした。俺たちを作った人間共の下から脱走した俺たちはそれがなんなのかを探そうとした。

他のグリードと違って空を飛べる俺は単独で探し回っていた。

だが探し物がなんなのか自分でもわかっていないんだ。見つけられるはずがなかった。

探し物が見つからないのに苛立った俺はヤミーを作ってみることにした。ヤミーを作るには人間の欲望が必要だ。俺は感覚を研ぎ澄まし、欲望の気配を探る。

すぐに欲望は見つかった。

見るからにお金が欲しそうなおっさん……泥棒からだ。

泥棒をヤミーの親にすることにした。金が欲しい……ありふれた欲望だがシンプルな分パワーもある。

「おまえの欲望、解放しろ」

俺はセルメダルを泥棒に投げ入れた。泥棒の体からミイラのような白ヤミーが這い出る。白ヤミーはヤミーの幼体。メズールとガメルのヤミー以外は皆ここから成長する。

道いく人からお金を奪った白ヤミーは変化した。人型の赤色のオウム……オウムヤミーってところか。オウムヤミーは奪った金を泥棒の隠れ家に持っていく。

鳥は巣を作る種類が多い。俺のヤミーもどこかを巣にしてそこを中心に活動する傾向が強い。

隠れ家にお金が運ばれるたびに泥棒は喜びセルメダルが貯まる。セルメダルが貯まれば俺は得だし、ただでお金が来るんだから泥棒も

得だ。ヤミーは順調に育っていた。

そろそろヤミーからセルメダルを回収しようかと考えていた時……その時にやつは現れたんだ。

やつは金を狙ったオウムヤミーの手をかわし、ヤミーを睨み付けた。オウムヤミーはその鋭い視線に一瞬たじろいだ。

俺はやつの顔を見た。歳は40つてところか？やつの身にまとう雰囲気は他人を威圧するものがあつた。

やつは腰に何かをつける。その右端からベルトが伸びてやつに装着された。そしてやつは手に三枚のメダルを取った。

バカな……あれはコアメダルじゃないか！？

やつはコアメダルをバックルに空いている3つの穴に差し込んだ。そしてベルトの右側についている円盤を手に取り、バックルに走らせた。

「変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ！タトバ・タ・ト・バ！』

歌！？なんだ、あの歌は！？嫌、重要なのは歌じゃない！

あいつの姿が変わっている。足は緑色になった。黄色くなった腕の手首には鉤爪がついている。胸には上からタカ、トラ、バッタの絵がついたサークルがある。そして頭は鳥を思わせる緑の目を持つ赤い仮面。人間じゃない。なんだ、あれは！？

俺が驚いている間にもあいつはオウムヤミーを攻撃している。本来ならヤミーを援護するべきだが、俺はやつの力を見てみることにした。

やつは両腕の鉤爪を展開し、ヤミーを切り裂く。やつの攻撃は素早く、オウムヤミーは反撃もままならない。オウムヤミーは口から火炎弾を連射した。やつは火炎弾を鉤爪でなんなく切り裂いていく。

ピンチのオウムヤミーは飛び上がった。空を飛んで逃げるつもりなんだろ。それを見たやつはメダルを別のメダルと入れ替えた。そして再びあの円盤を走らせる。

「タカ・ウナギ・バッタ！」

今度は歌わないのか。嫌、だから驚くべきはそこじゃない。やつの腕が青色になっていて、両肩には白いムチがついている。

やつは両手に肩のムチを握る。そのムチで逃げようとしたオウムヤミーを捕まえた。ムチから電撃が走りオウムヤミーを苦しめる。そのままやつはムチでオウムヤミーを地面に落とした。

やつは再びメダルを換える。再び歌が流れてやつの腕が黄色くなった。なんなんだ、あの歌は？嫌、何度も言うのが重要なのは歌じゃない！

やつはオウムヤミーの近くにつくと背中の中を羽をもぎ取った。もぎ取られた羽はセルメダルとなって地面に転がる。

オウムヤミーが空に逃げるのを阻止したのだ。やつはオウムヤミーを蹴り飛ばすとまた円盤を走らせる。

「スキヤニングチャージ！」

やつの足がバツタの足みたいに變形した。やつはその力で高く跳び上がる。やつは自分とオウムヤミーの間に現れた3つのリングをくぐってオウムヤミーにキックを食らわせた。オウムヤミーはその力に耐えきれず爆発。メダルとなって飛び散った。

俺のヤミーはかなりメダルを集めていた。セルメダルの量が多ければ当然發揮できるパワーも大きくなる。だが、やつはそのヤミーを難なく撃破した。

とんでもない力だ。

コアメダルの力を持つ戦士……やつは一体……

やつが俺を見ている？嫌、こんな空にいる俺を見れるはずが……やつは近くに落ちていたセルメダルをとるとそれを空に投げる。

猛スピードで飛ばされたセルメダルはおれに吸収された。

間違いない。やつは俺が見えている。やつの赤いメダルには俺と同じ鳥の力があるんだ！

俺は地面に降り立った。

「お前、何者だ？」

俺の質問にやつはこう答えた。

「我が名はオーズ。世界の全てを望むものだ」

これが俺とあいつ……オーズとのファーストコンタクトだった。

アंकと800年前とファーストコンタクト（後書き）

お読みくださりありがとうございました。

今回はアंकとオースのファーストコンタクトでした。

それではまた次回お会いしましょう。

力と裏切りと太陽コンボ（前書き）

第二話です。

いきなりコンボが登場します。

タトバもコンボですけど。

それではお楽しみください。

力と裏切りと太陽コンボ

俺は仮面の男……オーズに一番気になることを聞いた。

「お前が持つコアメダル、それはなんだ？」

「お前たちは自分たちが何か欠けていると思ったことは無いか？」

ああ、そうだ。だから俺たちはそれがなんなのかを探していた。

「俺たちに欠けているもの……それがそのコアメダルなんだな」

「そうだ。お前たちは最初、ただの十枚のメダルに過ぎなかった。そのメダルから一枚を抜いた時お前たちは誕生した」

「なぜそんなことが……」

誕生の瞬間など覚えているはずもない。十枚から一枚抜き取っただけでなぜそんなことがおきるんだ？

「私はメダルが一枚欠けたことでそれを満たそうとする欲望が生まれたためではないかと考えている」

欲望……つまり、俺たちはメダルを取り戻すためにこの姿と力を得たというわけか。

「なるほど。だが、そのベルトはなんだ？ コアメダルの力が使えるようだが……」

「これはオーストライバー。このバックルに挿入したメダルをこのオースキャナーでスキャンすることで私はコアメダルの力を取り込むことができる」

オースキャナーはあの円盤か。

「お前はそのベルトでメダルの力を利用するつもりだったんだな」

「その通りだ。さて、鳥のグリードよ。聞きたいことはそれだけか？」

やつの体から戦意を感じる。あいつは……

「ならばそろそろお前のコアメダルを渡してほしいのだが……」

やつの狙いは俺のコアか。どうする？こいつから逃げるのは不可能じゃない。他のグリードと協力すればこいつを倒すこともできるはずだ。だが……

「待て。まだある」

「なんだ？私はもう待てないのだが……」

「お前は全てのコアを手にいれてどうするつもりだ」

「くくく……そんなことか。私はこの世の全てが欲しい。そのためには力が必要だ。絶対的な力が！私は全てのコアメダルを取り込み、人を越え、獣を越え、神となるのだ！」

神……どうやらこいつは途方も無い欲望を持っているようだ。全てのコアメダル……その力を取り込めば……。

「オーズ。俺と手を組まないか？」

俺はやつに取り引きを申し込んだ。

俺たちはグリードのアジトに来ていた。

「ここにやつらがいるのか？」

「ああ、間違いない」

意外なことにオーズはあっさり俺と協力することをえらんだ。俺と組むほうがコアメダルを集めるのに都合がいいと思ったんだろう。

「お前がいくら強いといってもヤミーとグリードじゃ桁が違う。油断すんなよ」

「案ずるな。このタトバコンボはグリードに対して最も有効なはずだ」

グリードに対して最も有効？ 特になにか変わったところがあるようには見えないが……。

「俺が先に仕掛ける。お前は後から出てカザリを倒せ」

「私に指図するか、鳥のグリード」

「鳥のグリードじゃない、アंकだ。なんだ、指図されるのは不満か？」

「嫌、構わん。それが最善の手なのだろう。しかし、カザリとは誰だ？」

「カザリは猫のグリードの名だ。虫のグリードはウヴァ。水棲生物のグリードはメズール。重量系のグリードはガメルだ」

「名前か。なぜそのカザリを最初に狙えと？」

「あいつは俺と同じく頭がキレる。逃がしたら厄介だ」

俺と相性の悪いメズールを片付けて欲しい気もするが……カザリはグリードの中でも一番狡猾だ。逃がしたらどんな反撃をしてくるかわからない。

「わかった。任せておけ」

「じゃあ、行ってくる」

俺はアジトの中に入り込んだ。

「アंक、ようやく戻ってきたか」

ウヴァが俺を出迎える。

「ずいぶん遠くまで行ってたんだね」

「ああ」

カザリもいる。メズール、ガメル。全員揃っているな。

「帰って来たのね、アंक。何かわかったことはある？」

メズールは俺に質問してきた。呑気な奴らだ。これから俺が何をするかも知らずに……

「ああ。面白い情報を手にいれたぜ」

「どんな情報だ？」

「それはな……」

俺は背中の中を翼を広げた。

「アंक！？」

「あなた……」

「食らえ！」

俺は背中の中を羽から炎の弾を発射する。

一番俺に近かったウヴァは弾をまともに食らう。だが、メズールは水流で相殺。ガメルは持ち前の防御力で耐えきり、カザリは地面を転がってよける。

「アंक、一体なにを!？」

「今だ!」

俺の後ろからオーズが飛び出す。オーズは右腕のトラクロードカザリを貫いた。

「グウ!」

「カザリ!」

「お前は……一体……」 「我が名はオーズ……貴様らのメダルを奪う者だ」

オーズはそう言ってトラクロードを引き抜く。

クローの間にはコアメダルが二枚挟まっていた。

コアメダルが失われたことでカザリの下半身から装甲が消えていた。

「くっ……僕のメダルが……」

「まだだ。貴様のコア、全てを貰う!」

オーズはトラクロードで再びカザリを貫こうとする。

「そう好き勝手させるか!」

ウヴァが割り込んでカザリへの攻撃を邪魔する。

「余計なことを……」

「アंक、あなたまさかあいつと組むつもり!?」

「ああ、そうだ！俺は全てのコアの力を手にいれる！オーズと組めばそれが可能だ！」

俺は炎をメズールに放つ。だがメズールは水流で炎を相殺した。

「ウヴァ、ガメル。あなたたちはカザリを援護してオーズを倒しなさい！私はアंकの相手をするわ！」

「わかっている！」

「わかった」

ガメルとウヴァはメズールの指示に従い、オーズに襲いかかった。
三対一……さすがにまずい！

「オーズ！」

「あなたの相手は私だと言っているでしょう！」

俺はオーズを助けに向かおうとした。だが、メズールは水流で俺の動きを妨害する。……やはりメズールを狙わせるべきだったか？今さら言っても遅いか！

俺とメズールが炎と水流を撃ち合っている間、オーズは一人で戦っていた。

だがガメル、ウヴァ、カザリ……三体のグリードを相手にしてさすがのオーズも苦戦していた。

「カザリ、やれるか!？」「メダルが無いからって甘く見ないでくれる?」

カザリは突風でオーズを攻撃する。ウヴァもそれにあわせて角から電撃を放つ。風と雷の連続攻撃、オーズはよけるので精一杯だ。

「その調子なら大丈夫そうだな」

「おい」

足の遅いガメルは遅れて援護にきた。

「お待たせ」

「遅いぞ、ガメル」

「仕方ないさ。三人であいつを倒そう」

ウヴァとカザリ、ガメルは連携攻撃をかけてきた。

先行するウヴァとカザリの攻撃はトラクローで弾くことができた。だが、ガメルの突撃は防げず、オーズは吹き飛ばされてしまう。

「俺たちグリードが三人がかりなんだ!負けるはずが無い!」

「僕のメダル、返してもらっよう!」

「お前、倒す」

「くくく……」

ピンチにも関わらずオーズは笑いだした。

「何がおかしい？」

「嫌、お前たちの力は実に素晴らしい。私もお前たちを作らせた甲斐があつたというものだ」

「作らせた？……何を言っている？」

「くくく……」

オーズは先ほど手に入れたカザリのメダル……ライオンとチーターのメダルだ。その二つをバツクルのものと交換する。

「お前たちの素晴らしい力は……私が使わせてもらつて。変身！」

オーズはオースキャナーでメダルをスキャンした。

「ライオン！トラ！チーター！ラタラタラトラタラ！」

前のとは違う歌だ。今、オーズはカザリの持つ3種類の猫系メダルを使っている。

ライオンのような仮面とトラの爪、チーターの足……全てカザリのものだ。

「うおおー！」

強烈な閃光がオースの頭部から放たれる。

その閃光は周囲を焼き払った。離れていた俺とメズールは避けられた。だが、他の三体のグリードは大ダメージを食らう。

「ぐああああ！」

「うああああ！」

「眩しいー！」

そのダメージでウヴァとカザリのコアが飛び出す。ウヴァは三枚、カザリは一枚だ。

「ふん」

オースはそのコアをてにいれた。ウヴァの足からカザリと同様に装甲が消える。

「俺の……俺のコアが……」

「素晴らしい……これがコンボの力か」

コンボ？三つ同系統のメダルを集めるとあの力が出せるのか？今はいいか。こいつらに止めをさすのが先だ。

「逃げるわよ！ガメル、ヤミーを出して！」

「わかった」

ガメルは自分にメダルを投入する。ガメルの体からサイの姿を持つサイヤミーが出現した。

ガメルは己の欲望でヤミーを産み出せる唯一のグリードだ。やつのヤミーは最初から成体でパワーも高い。

サイヤミーはオーズに突進する。オーズはその攻撃をかわしトラクローで反撃する。

「ふん。一気に片付けてくれる！」

オーズはチーターの足が生み出す超スピードで走り回る。そのスピードに反応仕切れずサイヤミーはすれ違うたびにクローで切り裂かれる。

サイヤミーは手も足も出ない。

オーズがサイヤミーと戦っている間にウヴァたちは離れようとしている。

「くそ、メダルを取られたまま……」

「今はメズールの策に従うのが最善だよ」

「逃げろー！」

「逃がすかよ！」

「あなたの相手は私だといっているでしょう！」

メズールの水流で俺は身動きが取れない。くそ！

「さっさとそいつを片付けろ！」

「言われるまでもない！」

オーズはオースキャナーでメダルをスキャンした。

「スキャニングチャージ！」

オーズは目の前に出現した三つのリングをくぐる。一瞬ヤミーの前に止まると光るクローでその体を切り裂いた。

サイヤミーのセルメダルがオーズの手に落ちる。

「一枚だけだと？」

「そんなことよりメズールを倒せ！早く！」

「任せてお……」

オーズは突然膝をついた。

「どうした！？」

「何が起こったかわからないけど……逃げるわよ、三人共！」

「させるか！」

俺の炎とメズールの水流がぶつかり水蒸気生まれる。水蒸気の煙が消えるとすでにメズールたちの姿はなかった。

「ちっ！」

俺はオーズの元に走った。

「おい、どうしたんだ？」

「コンボの副作用だ。……我らもここを出るぞ」

オーズは変身を解除して人間に戻った。オーズの力……さすがに無敵ってわけじゃないみたいだな。

力と裏切りと太陽コンボ（後書き）

グリードが完全体なのにいつもと変わらないと思われた方もいるか
と思います。

まだテレビで完全体が活躍していないため、強さがわかりません。

そのため不完全体と変わらない実力になりました。

不満に思われるかもしれませんがご了承ください。

テレビではプティラコンボが登場しましたね。

中々かつこいいと思いますが、必殺技が最強フォームにしては地味
なのが少し残念ですね。

それではまた次の更新で。

宿とウヴァとカマキリ殺法（前書き）

今回は他キャラ視点もあり。

それではお楽しみください。

宿とウヴァとカマキリ殺法

コンボとやらの使用はオーズの体に大分負担を与えるらしい。

俺たちはグリードのアジトから出た後、近くの宿に泊まった。しばらくはここでオーズの回復を待つしかない。

不意ながら俺は人間に化けて行動している。

グリードの姿のままだと人間が無駄に騒ぐからな。

それにしても人間ってのは不便なもんだ。メダルがあれば回復が効くグリードと違って時間をかけなきゃ治らないんだからな。

俺はオーズの回復を待つ間、外で情報を集めることにした。

俺は他のグリードを裏切った。もうあいつらの下に戻ることはない。オーズを利用して全てのコアメダルを手に入れる。俺に残された道はそれだけだ。

g r e e d s i d e

アंकとオーズとか言うやつから逃れた俺たちは森の中にいた。

俺とカザリのコアを奪ったあいつらのことを考えると怒りが沸き出る。

「アंकの野郎……良くも俺たちを……！」

「アंकが食えないやつだと言うことはわかっていたじゃないか」

「カザリ、お前は悔しくないのか。アंकに裏切られたばかりかコアメダルを取られたんだぞ！」

コアメダルは俺たちグリードにとって命の源だ。それはあいつだって知っているはずだ。それなのに……

「確かに悔しいよ。でも苛立っていてもコアは戻ってこないよ」

「くっ……」

そんなことは言われずともわかっている。だがメダルを取られて黙ってなどいられるか。

「落ち着きなさい、ウヴァ。まずは現状を整理しましょう」

……メズールの言う通り、今は対策を練るべきか。しかし、ガメルのやつは俺たちの話を聞いているのか？木の棒で遊んでいるが……

「ガメル、こっちに来なさい」

「わかった」

ガメルは木の棒を持って歩いてくる。

「これ貸してね」

「うん」

ガメルから木の棒を取ったメズールは地面に絵を書いている。

俺たち4人とアंक、そしてオーズの顔だ。

「このオーズ、そしてアंकが私たちの敵。あいつらは私たちの持つコアメダルを狙っている」

「オーズ……こいつは一体何者なんだ？」

アंकに比べてこいつは謎だらけだ。

なぜ俺たちグリードのメダルを狙うのか。なぜコアメダルを持っているのか。なぜコアメダルの力が使えるのか。こいつの正体には疑問が尽きない。

「ちょっと僕の意見を聞いてくれるかな。僕はこいつが持っているコアが僕たちの欠けたものじゃないかと考えている」

「欠けたもの……俺たちは9枚じゃなくて10枚コアメダルを持っていたのか？」

カザリは頷く。

「だとしたらなぜ俺たちはコアメダルを抜かれたんだ」

「さあね。もしかしたら欠けたからこそ僕たちが生まれたのかもしれない」

どういうことだ？

「なるほど。私たちは欠けたものを埋め合わせようとする欲望から

生まれた。そう言いたいよね」

「うん」

欲望……欲望から生まれたからこそ俺たちは欲望を感じとる力が強いのか。

「もし10枚コアメダルを揃えたら俺たちはどうなるんだ？」

「それはわからないよ。このままか、ただのメダルに戻るのか。どの道、オーズを倒さないと僕たちが10枚目を手にすることもない」
それもそうだな。今はやつを倒す方法を考えるのが先決か。

「どうする？4人で攻めるか？」

「相手にはアंकもいるのよ。正面から戦っても互いに消耗しあうだけよ」

「ヤミーを作ってセルメダルを稼ごう」

カザリの提案を採用するしかないか。セルメダルも俺たちに必要だしな。

「よし、まずは俺が行く」

「待ちなさい、ウヴァ。オーズとアंकが私たちを探しているはずよ。できるだけ離れたところでヤミーを作るべきよ」

「ならメズール。お前は離れたところでヤミーを作れ。俺はやつら

を陽動する」

俺は森から出ていく。

俺についてくるやつはいないと思った。

だが背後から誰かがつけてくる。

「カザリ、お前か」

「君一人じゃ心配だからね。どうせヤミーでオーズを倒す気なんじゃない？」

気づいていたか。

「欲望が強ければ強いほどヤミーも強大になる。親次第なら、オーズも倒せるはずだ」

「なるほどね。お手並み、拝見させてもらっよ」

s i d e o u t

グリードは見つけられなかった。俺は宿に戻ってきた。

「おい、体の調子はどうだ？」

「だいぶましになった。もう少しで動けるだろう」
「そうか」

「グリードの動きはどうだ？」

「今はわからん。だが、何かを企んでいるはずだ」

コアメダルをとられたあいつらが何もしないはずが無い。近いうちに何かするはずだ。

「ならば、一度城へ戻るか。そろそろ武器もできているだろうからな」

武器か。まあ、オーズが強くなれば俺も楽になるが……

「コンボとやらはダメなのか？」

「ダメだな。同系統のメダルを三枚、同時に使用すれば強大な力が使える算段はあった」

オーズは力ザリから奪ったライオン、トラ、チーターのメダルを弄ぶ。

「だが、コンボは負担がかかる。何度も使っては私が戦えなくなってしまう」

俺もオーズが戦えないのは困る。コンボの使用を抑えるようフオローするしかないな。

チャリン……

オーズの正体を聞こうとした俺の耳にメダルの音が響いた。

メダルの貯まる音……誰かがヤミーを作ったのか。

こいつに教えるべきか？嫌、メダルを増やしてからのほうがいい。それにヤミーはメダルを誰かに渡しに行くはずだ。

オーズとは協力関係だが、何も全てのメダルを渡す必要は無いだろう。

ヤミーを監視して俺がメダルを手に入れる！

「どうした？突然黙り込んで……」

「嫌、なんでもない」

俺は宿から出ていった。
空から町の様子を見る。

いた。ハチのヤミー……ウヴァのヤミーだな。

人を襲っているようだが……欲望はなんだ？

人に聞いてみるか。

俺は地面に降り立ち、見物人に尋ねる。

「おい、襲われたのは誰だ？」

「ああ。商人だよ。この町には結構いるんだよな」

なるほど。この商人への個人的な恨みか、あるいは商売の邪魔だったか。

後者ならもっとメダルが貯まる。

事態は俺の期待通りに進んでいた。

どうやらこの町は商人によって栄えているらしい。

ハチヤミーはまだまだ商人を襲う。

このペースならセルメダルも早く貯まるはず……

「おい、アंक。あれはグリードの僕か？」

オーズが来た。余計なことをさせないようにしなとな。

「あれはヤミー。グリードが人間の欲望を使って生み出す怪物だ」

「ほう。そんな能力までお前たちは持っているのか。それでお前はなぜあれを放っているのだ？」

「ヤミーは欲望を叶えれば叶えるほど、セルメダルを貯める。やつは商人を襲うことで欲望を叶えている。このままやつを放っておけばウヴァのところにセルメダルを持ってかえるはずだ」

「なるほどな」

納得した後オーズはコアメダルを準備した。

「おい。話を聞いていたのか！やつを放っておけばウヴアの所に……」

「ウヴアとは緑色のグリードのことだろう？やつならば大丈夫だ」

俺が止めるのも聞かずやつはメダルをベルトにセット。

そしてスキャンした。

「タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ！」

変身したオーズはハチャミーの攻撃を防ぎ、商人を逃がす。

「何考えてるんだ、あいつは！」

他人なんてほっときやいいだろう！やつを放っておけばウヴアのところにつくの……コアメダルが欲しいんじゃないのか！？
オーズはハチャミーの右腕についた鋭い針をかわしていく。

「先の戦いで得た、これを使うか」

オーズはメダルを入れ換え、スキャンする。

「タカ・カマキリ・バッタ！」

オーズの腕にカマキリの鎌のような武器、カマキリソードが出現する。

逆手に持ったカマキリソードが煌めき、ハチヤミーを傷つけていく。

「オーズ！」

雷を放ちながら、ウヴァが姿を現した。どこに隠れていたんだ？

「俺のメダルを勝手に使うな……」

ウヴァは自分のメダルを狙っているみたいだな。

「来てくれると思っていたぞ、ウヴァ」

「馴れ馴れしく呼ぶな！……俺が来ると思っていただと？」

「そうだ。お前はグリードの中でも直情型の性格をしているようだからな。メダルを見ればすぐ現れると思っていた」

最初からコアメダルを餌にするつもりだったのか。確かにウヴァには有効な手だったみたいだな。

「さあ、貴様のメダルを奪わせてもらうぞ」

「ふざけるな。今回は二対一……お前にメダルを使わせる隙は与えねえ！」

そうはさせるか。俺はグリードに戻るとハチヤミーに炎を浴びせる。

「アंक！いつの間に……」

人間に化けていればグリードも気配を探れないのか？これはいいこ

とを知ったな。

「アंक、お前はウヴァを押さえる。私はあのヤミーを倒す」

「好きにしろ」

計算は狂ったが……コアメダルを手に入れるチャンスなのは変わっていない！

「アंक、オーズ！おまえら一人残らず……消してやる！」

ウヴァは電撃を帯びた爪を俺に突き立てる。

俺は飛翔してウヴァの上に行く。

「降りてきて戦え！」

ああ、そうしてやるよ。

俺は地面すれすれを飛び、ウヴァの胸を爪で薙ぐ。
セルばかり飛び散る。さすがにコアは奥か。

「てめえ……」

「不完全体のお前が俺に勝てるはずが無いんだよ。そんなことわ
からないのか？」

「殺す！」

ウヴァの爪が何度も飛んでくるが、俺にはかすりもしない。

俺はやつの腹に炎をぶちこんだ。

オーズの戦いも順調に進んでいる。

ハチャミーは右腕の針を連続で発射する能力を持っていた。

オーズもさすがにその攻撃には苦戦した。カマキリソードは威力は高いがあくまで接近戦の武器だからな。

オーズはまたメダルをチェンジした。

「タカ・ウナギ・チーター！」

今度は腕にムチを持ち、足を高速で動けるチーターに変えた。

オーズはムチでハチャミーを叩く。電撃を受け、怯むハチャミー。

そいつに今度は高速の蹴りをぶちこんだ。

ハチャミーはメダルをばらまきながら大きく後退する。

「タカ・カマキリ・チーター！」

オーズは再び腕にカマキリソードを持つ。

更にもう一度メダルをスキャンした。

「スキヤニングチャージ！」

相手をとらえたオーズはチーターの足で走り出す。

ハチャミーの針が飛んでくる中、オーズは針を無視するように駆け抜ける。

そしてオーズとハチヤミーの距離がゼロに近づいた時……ハチヤミーは切り裂かれた。

ハチヤミーは爆散し辺りにメダルが飛び散る。

「くそ、ヤミーが……」

「さあ、次はお前のコアメダルだ」

俺とオーズはウヴァに向かって歩む。
もうウヴァに逃げ場は無い。

「くう……」

「終わりだ。ぬう！」

オーズが突然吹っ飛んだ。

「オーズ！ぐわあ！」

俺も衝撃に襲われる。なんだ、この攻撃は……

「ウヴァ、もうやられたみたいだね。君のヤミー」

カザリがウヴァの隣に立つ。

その横には更にヤミーが立っている。

チーターのヤミー……さっきのはあいつの攻撃か！

「紹介するよ、オーズ。こいつが僕のヤミーだ」

宿とウヴァとカマキリ殺法（後書き）

カマキリソードが活躍しました。

オーズ第七話の話からグリードが人間に化けている場合、他のグリードにも見抜けないって設定です。

それではご意見ご感想をお待ちしています。

チーターと民とメダルの刃（前書き）

今回は最近余り使われないあの剣が登場です。

それではお楽しみください。

チーターと民とメダルの刃

「紹介するよ、オーズ。僕のヤミーを」

カザリまでヤミーを作っていたとはな。

ウヴァだけと思って油断した。

「やれ」

カザリの指示でチーターヤミーは動きだした。
高速で駆け回り、俺とオーズを爪で切り裂いていく。
俺は炎を発射するが、やつに当たることはなかった。

「速い……やつの足を止めないと……」

『タカ・トラ・チーター！』

オーズはメダルを変えていた。腕をカマキリからトラに。恐らくス
ピードでやつに追い付くためだ。だが……

「待て！カザリがいる！メダルを狙われるぞ！」

カザリが自分のメダルを取り返すチャンスを黙って見ているとは思
えない。

最悪、チーターヤミーと一緒に襲ってくるかもしれない。

「構わぬ。振り返ちにしてくれる！」

だが、オーズは走り出した。そのままチーターヤミーとの格闘戦に突入する。

俺の忠告も聞かずに……あの野郎……

だがぼやぼやしているわけにも行かないか。せめてカザリとウヴァを足止めしないと。俺は2人に炎を放つ。2人は側転でそれをかわした。

「アंक。君は本気であいつと組むつもりかい？」

カザリが聞いてきた。今さら何を……

「もちろんだ。お前らのコアメダルを集めるためにな」

「なんだと！？正気か、アंक！」

「ああ。俺はお前らのようなバカとは違う。俺は更に強くなる。そのためにはコアメダルが必要だ」

「他人のコアメダルはグリード同士でも異物さ。君に制御できるかな？」

もちろん多少のリスクは承知している。コアメダルの制御に失敗すれば俺は暴走するだろう。だが、俺が進化する一番の近道は他人のコアメダルを取ることだ。オーズを利用して俺はそれを果たす！

「やってみせる。まずはお前のコアメダルだ！」

俺はカザリに向かっていく。

オーズとチーターヤミーの戦いも行われていた。

オーズのトラクローとチーターヤミーの爪が同時に伸び、互いを切り裂く。

続いてオーズがキックを出すとチーターヤミーも対抗して足をぶつける。

あのヤミー、スピードだけじゃなく反射神経もいいみたいだな。カザリのやつ、どんな欲望からあのヤミーを……

俺と拳を交えていたカザリは突然距離を取った。

「オーズ。僕のコアは使わないのかい？まだ使っていないコア……何で使わないの？」

「カザリ、挑発してどうする！？」

不味いな。オーズはコンボを使えば体力を消耗する。ある程度回復しているだろうが、今度は体力が持つかどうか……

「どうしたんだい？僕のメダルを三枚使えばすごい力が出せるんだろ。今ならウヴァのメダルでもやれるはずだよ？」

「おい……」

「それとも使えない理由があるのかい？」

カザリは大分答えに近づいている。今オーズにコンボを使わせて……こいつらを片付けるまで体力が持つのか？このままではカザリにオーズの弱点が知られてしまう。どうするんだ！？

手を合わせる音が響く。

オーズは拍手をしていた。何やってるんだ、このバカは!?

「隠していてもしょうがない。カザリよ、お前の推理通りだ」

「……認めるんだね。同じグリードのコアを三枚使うリスクを……」

「その通りだ。そして三枚のコアメダルを使うことをコンボという」

「……コンボか。覚えておくよ」

カザリもオーズがあっさり認めることは考えていなかったようだ。反応が鈍い。

「オーズ。僕も一つ教えておくよ。僕のヤミーは寄生型。今ヤミーを殺せば中に取り込まれた人間も死ぬ」

「ほう、そうか。覚えておこう」

オーズの反応はまたあっさりしたものだった。

ヤミーを殺せば人間が死ぬ。その事をなんとも思っていないようだ。まあ、俺はの方がやりやすいがな。

「カザリ、オーズに攻撃を集中だ。今ならやつを倒せる」

コンボが使えないとわかったんだ。ウヴァの判断は当然の物だろう。

「……嫌、やめておくよ」

だが、カザリは退くことにした。

「何を言っている？ 今なら……」

「良いから退くよ」

カザリは自分を中心に風を出した。ウヴァもその風に包まれる。

「おい、今ならオーズを……」

「首は預けておくよ、オーズ」

カザリはウヴァと共に風となって消えた。

チーターヤミーもどこかに走り去った。

「アंकよ、後で合流だ」

オーズもどこかに走り去った。

合流地点ぐらい説明しろ！

俺はハチャミーが倒れて散らばったセルメダルを集めて、飛んでいった。

しかしなぜ……カザリは引きあげたんだ？

g r e e d s i d e

「カザリ、どういっつもりだ！」

俺は力ザリを怒鳴り付けていた。

「どういっつもりって？」

「とぼけるな！もう少しでオーズを倒せたのに……」

「……ウヴァ。君は本気でオーズの弱点がわかったと思ったのかい？」

なんだと？

「どういう意味だ」

「オーズは同じ種族のメダル三枚を使ったコンボを使うとリスクがあることを認めた」

「そうだ。あいつがあのを力を使えないなら俺たちに有利じゃないか？」

「けど、嘘の可能性もある」

「お前の考えすぎじゃないか？」

やつはあのヤミーと戦う時コンボを使わなかった。使っていれば楽に勝てるだろうに。

「かもしれない。でもあんなあつさり認めたんだ。もしかしたらコンボ以上に恐ろしい力を持っているのかもしれない」

「コンボ以上だと……」

やつはコンボでガメルのヤミーを簡単に倒した。そのコンボよりも恐ろしい力……

「なんなんだ、それは？」

「さあね。想像もできないよ」

本当にそんな力があるのか？嫌、それこそ考えすぎじゃ……だが……

「あいつが何をしてくすかわからない以上、一旦離れるのが最善の手だよ」

悔しいが……認めざるを得ないか。

side out

俺はあの後オーズと宿で再会できた。

「来たかアंक。お前に頼みがある」

頼みだと？なんだ？

「城に行つて私の武器を取ってこい」

「ふざけんな！俺はお前の使い走りになった覚えはねえ！」

「この手紙を渡せば私の遣いだとわかる」

「人の話を聞け！」

「お前は人ではないだろう」

「そんなところだけ聞くな！いいか、俺は……」

「私が強くなればメダル集めも楽になるだろう」

その通りだが……だがこいつがあんまり強くなるのも危険

「では頼んだぞ」

オーズが強くなる危険を考えているうちにあいつは手紙を渡してきた。

「行けばいいんだろ、行けば……」

俺は納得できなかった。だが、これ以上こいつと話しても無駄だと思った。

俺は城へ向かった。

g r e e d s i d e

「あれがお前のヤミーの親か」

「そうさ」

ヤミーの親の様子を俺は見ていた。親は女だ。チーターの能力で上がった脚力を利用し、食糧を盗んでいる。

「あの女の欲望はなんだ？」

「来なよ」

俺はカザリと共に建物の上を移動する。バカな人間共は自分たちが見下ろされていたことに気づかない。ある建物につくとカザリは止まった。

「見なよ」

「あれは……」

女は食料を子供に渡していた。

「どうやら飢えた子供に食料を渡すのが彼女の欲望みたいだよ。この町は貧富の差が激しいようだからね」

「満足に食事もできないってことか。しかし、他人に尽くす欲望とは……変わった欲望だな……」

「あの子供達は兄弟か何かじゃないかな。身内を助ける欲望ならわからなくもないよ」

身内といえど他人は他人。人間は自分の幸せを願うやつらばかりだ。富める者と貧しきものがあるのがその証拠だ。そして、富める者は貧しき者から更に採取するだけ。家族といえど他人に尽くす欲望はやはり珍しい。

「あいつのセルメダルはいつ回収するんだ」

「嫌、回収はしない。ヤミーにはオーズと戦ってもらう」

「何？」

「オーズが何を隠しているかわからないからね。ヤミーと戦わせてオーズの出方を探る」

「……やつらにセルメダルを渡すことになるぞ」

「仕方ないね。メズールのヤミーが育っていることを期待するよ」

s i d e o u t

俺は城の前で門番に手紙を見せた。何でも手紙には王の印が書いてあったらしい。

あいつはどうやらこの国の王らしい。だが、あいつが誰だろうと関係ない。

メダル集めに利用するだけだ。

俺は部屋に案内された。そこには女がいた。

金髪を背中まで伸ばしているサファイアのように青い輝きを宿す瞳の女。白と黒の服が絞まった雰囲気を与えている。

「お前が王からの遣い？」

「そうだ」

「知らない顔ね。王が他人を使うのもいまいち信じられないけど…」

「俺のことはいい。さっさと武器を渡せ」

「……わかったわ」

女は机の上に置いた箱を開ける。

「その前に説明しておくわ」

箱の中には鞘に収まった剣があった。

女が鞘を抜く。

剣は刃に三つ穴が空いていた。

「これはメダジャリバーと言う。この刃にある穴にセルメダルをセツトすることで真の力が発動するわ」

女は再び鞘に剣をしまう。

「それを王に伝えなさい」

女は箱ごと剣を渡した。

「わかったよ」

俺はぶっきらぼうに告げ、箱を運んだ。

「待ちなさい」

女が俺を呼び止めた。

「なんだ？」

「王のメダル集め……順調に進んでいるのでしょっね？」

「一応な」

「……そう。行っていいわ」

俺はさっさと城を出ることにした。

俺は町に戻った。

そこでは既にオーズがチーターヤミーと戦っていた。
ウヴァとカザリは……見当たらない。

高見の見物か？

チーターヤミーはオーズを回し蹴りで蹴り飛ばした。
俺は地面に降り、箱からメダジャリバーを取り出す。

「オーズ、これを使え！」

俺が投げたメダジャリバーをオーズは受け取り、鞘から引き抜いた。

「穴にセルメダルをセットしろ！」

「……持っていないぞ」

……そういえばこいつこれまでコアしか使ってなかったか。
だが、俺はセルを渡すつもりはない。ただの一枚も。なら……

「ヤミーを攻撃しろ！やつが落としたセルを使うんだ！」

「それしかないか……」

オーズもその意見に納得し、チーターヤミーに向かう。

チーターのメダルでスピードを上げているオーズは、ヤミーをすれ違い様に切り裂いた。

ヤミーからメダルが飛び散る。

オーズはメダルを拾うが、チーターヤミーが爪で薙ぎ払う。

かろうじてセルメダルを握っていたオーズは穴にメダルをセットしていく。

その間もヤミーは爪を振るうが、オーズはかわしていく。

そして遂に三枚のセルメダルをセットした。

オーズがメダジャリバーをふりおろすがチーターヤミーは両手でガードする。

「ただ入れただけではダメか……ならば！」

オーズは後ろに下がるとオースキャナーでメダルをスキャンした。

『トリプル・スキャニングチャージ！』

音声が響くとメダジャリバーの刃に青い光が宿る。

「はあ……！」

オーズがメダジャリバーを振り下ろすと空間ごとチーターヤミーは切断された。

空間が戻るとともにチーターヤミーは爆発した。

……信じられん。空間ごとヤミーを切り裂くなんて。しかも空間だけ元に戻った。なんて滅茶苦茶な武器だ。

メダルが飛び散った後には黒焦げの女がいた。

こいつがヤミーの親だったのか。女の体にはメダジャリバーでつけられた傷があった。その傷からメダルではなく血が流れている。

その表情は自分に何が起こったかわからない様子だ。怒りも恐怖も感じるまもなくこの女は死んだようだ。

「おい、いいのか？自分の国民を殺して」

「知っておったか。ヤミーに取りつかれていたとはいえこの者は私を殺そうとした。殺すに値する罪だよ」

オーズは女から目を離す。

「行くぞ。宿の金は既に払ったし、この者に構う必要も無い。我らはグリードを探さねばならぬのだからな」

オーズはスタスタ歩いていく。人間共が明らかに視線を集中させているが気にしている様子もない。おそらく町を離れた後変身解除するつもりなんだろう。

俺はもう一度女を見る。こいつの欲望がなんだったか知らんが、それを追いかけたが故の末路だ。人間共の言葉で言つと自業自得だ。こいつも満足だろう。

俺もオーズについて町を出た。

チーターと民とメダルの刃（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

今回出たメダジャリバーは現在でオースが使っているメダジャリバーの基になった武器です。今と違ってオースドライバーみたいにメダルは直接穴に投下する仕組みになっています。

……しかし、ヤミーの親の描写適當過ぎる気が……。
アंकが人間に興味を持つ性格じゃないし、ストーリーに深くかわる存在でもありませんが余りに触れないのも……。

とりあえず完結目指して頑張りますのでご意見ご感想がありましたらどうぞお書きください。

館と悪魔と分身コンボ（前書き）

今回はガタキリバが登場。

このコンボ、テレビじゃ二回しか出ていないんだよね……。

館と悪魔と分身コンボ

俺たちはグリードを探している中、ある噂を聞いた。

森の中の館。そこから出る怪物が人間をさらっているという話だ。館には以前不気味な男が住んでいた。とてもこの世の者とは思えない醜悪な容姿をしているらしい。その容姿のために男はあらゆる人間から嫌われていた。怪物は男が人間に復讐するために召喚したのではないかとされている。

噂からはヤミーの匂いがぶんぶんする。オーズと俺は迷わず館に向かった。

予感的中した。

俺たちは小娘を抱えるヤミーと遭遇した。その姿はシャチに似ている。シャチヤミーは少女をさらい、森の中に走った。

「どうやら今度はメズールのヤミーのようだな」

「水棲系のグリードか。やつのヤミーはどんな特徴がある？」

「やつのヤミーは巣を作る。巣の中でヤミーは増殖する」

今度は大量のヤミーと戦わねばならないということだ。おまけにグリードも揃っているだろう。それに俺は水が苦手。不利なんてもんじゃない。

「どうする？ まともにやりあつたら負けるぞ」

「まともにやりあわねば良いのだよ。アंक、もし親を失えばヤミーはどうなる？」

親を失ったヤミー……なるほど。

「オーズ、館の男が怪物ならお前は悪魔だな」

「悪魔ではない、王だ。それで？どうなる？」

「ヤミーの力は親の欲望だ。親が死ねば欲望も死ぬ。すぐ消えてなくなることは無いが、力は大きく減少するだろうな」

「決まりだな。ヤミーの親を殺す。そしてグリードを探してコアを奪う」

全く恐ろしい男だ。こいつは人を殺すことをなんとも思っていない。花を摘み取るように、食事をするように、こいつは人を殺す。

最悪の可能性は考えるようにしているが、こいつと戦うのは避けたい。全てのメダルを集める前にこいつの弱点を探さないと。

g r e e d s i d e

私の坊やがまた人間をさらってきたわ。今日は小さな可愛らしい少女だった。

この前は30を過ぎた女性だった。年齢で相手を選んでいるわけでは無いようね。私の坊やはそのまま上の階に行った。宿主に少女を渡しに行くのだ。

あの少女も可哀想ね。この館の近くの村に住んでいたばかりに拐われるなんて。でも私に少女を助ける気は無い。私の坊や達に育ててもらわないと困るもの。

ウヴァとカザリが行ってしまった後、私とガメルはこの館を見つけた。私は館の主と会った。初めて見た時、自分の目を疑ってしまった。世の中にこんなに醜い生き物がいるなど想像さえしなかったわ。

彼と比べればヤミーの方がずっと美しいと思うほどよ。

彼はただ自分を愛してくれる女性を探したかった。でも彼は余りに醜い。館を出れば人は彼から逃げるか、無き者にしようとする。だから彼はこの館に閉じこもらざるを得なかった。

私は男からヤミーを作った。

ヤミーは間もなく人間をさらってきた。可愛らしい少女だったわ。でも少女は彼を愛してくれなかった。男の余りの醜さに気が触れてしまった。男はその現実を拒否するように少女を殺してしまった。

その日以来、ヤミーは人間をさらってくる。ほとんどが少女なのは男の欲望の影響かしらね。でもあの男を受け入れてくれる人間はいるのかしら。これまで様々な人間が連れてこられたけど、ダメだったし。

男の嗚咽が聞こえてきた。さっきの少女もダメだったようだ。まあ、欲望が強くなるのはいい。セルメダルはいくらあっても困らないのだから。

突然館の扉が開いた。扉から現れたのはウヴァとカザリだった。ヤミーの気配を察して来たのだろう。

私は遊んでいたガメルに呼び掛け、2人を迎えた。

「お帰りなさい。ウヴァ、カザリ」

「おかえり」

「おう」

「ただいま」

ウヴァとカザリは無事に戻って来た。コアメダルを取られることは無かったようだ。

「オーズについて何かわかったことは無いかしら？」

「色々わかったことがあるよ」

「聞かせて」

カザリは話始めた。

「オーズは同じグリードのコアを三枚使うとすごい力を発揮する。

その状態をコンボって言うらしい」

「コンボねえ。カザリ、あなたその名前どこで聞いたの？」

「オーズ本人さ。あいつはコンボを使うとリスクがあることも認めた」

「……自分で自分の弱点を認めるとはね。他には？」

「オーズは剣も持っている。セルメダルを使う剣だ」

「コアだけでなくセルも使い出したの」

私たちがから全て搾り取るつもりなのかしらね。とんでもないやつに目をつけられたものね。

「やつの剣は空間ごとヤミーを切り裂いた。なぜか空間だけは後で戻ったけど、とんでもない威力だよ」

空間を切り裂く剣か。セルメダルだけでもそれほどの威力を発揮するのね。

「ただ、こんな武器よりもっと恐ろしいものをあいつは持っている」
「何かしら、それは」

「あいつは僕のヤミーを倒した」

……それはつまり……

「中の人間ごとき」

「……オーズは人間を殺しても平気なのね」

「ああ。どんな恐ろしい手を使ってもおかしくないよ」

最悪、ヤミーの親を直接攻撃してもおかしくないわね。我ながらとんでもないやつに目をつけられたわ。

「だが、決着をつけるなら今だ」

「ウヴァ」

「お前のヤミーのおかげでセルメダルは補給できた。いつまでも逃げるのは趣味じゃない。そうだろ？」

私とカザリは目を合わせる。確かにいつまでも逃げる役というのは面白くないわね。

「いいわ。ここでオーズを迎え撃ちましょう」

決戦の場所は決まった。

s i d e o u t

森を抜けて館の前に着いた。館は壁が赤茶色になっている。特に変わったところのある館には見えないが、どこか不気味だ。森の中にあるせいだろうか？

「ここで館を燃やせば、中の親は死ぬだろうな」

「だが、グリードには逃げられるだろう。……やつらが中にいるならば」

「いるはずだ」

いてくれないと困る。追いかけてこは飽き飽きだ。

「まあいい。中に入ればわかる話だ」

オーズは館の扉をあける。鍵はかかっていないようだ。俺たちは中に入った。

中には大量のシャチャミーがいた。そろそろと……一体メズールはどんな欲望を使ったんだ？

「大歓迎だな……行くぞ」

オーズはメダルをオーズドライバーにセットし、スキャンする。

「変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ！』

オーズは変身した。俺もすぐにグリードの姿になる。

「さつさとウヴァ達を見つけてメダルを奪うぞ！」

「無論だ、行くぞ」

オーズはメダジャリバーを鞘から抜く。シャチャミーを刃で次々に斬っていった。

俺は炎をシャチャミーに浴びせる。シャチャミーはダメージを受けるが、水流を吹き返してきた。空中に飛んでそれを避ける。

「アंक！」

俺は雷を食らい、空から落とされた。落ちた俺にシャチャミーが群がる。

「良い気味だな、アंक」

ウヴァが二階から俺を見下ろしていた。

「俺たちを裏切った報い、そろそろ受けてもらうぞ」

「くそ……」

シャチャミーは俺を蹴ったり踏んだりしてくる。ヤミーの分際でよくも……だが、数が多すぎて逃げられない。

『クワガタ・ウナギ・バツタ！』

オーズドライバーの音声が響く。オーズがメダルを変えたんだ。

俺を囲っていた敵が電撃を受けて離れる。オーズは俺の近くにつくと、ムチを持って回転、敵を遠ざける。

「大丈夫か」

こいつに助けられるとはな。

「ああ」

「お前はウヴァを落とせ。このヤミーは私が相手をしてやる」

メズールのヤミーとは相性が悪い。こいつの言う通り、ウヴァと戦ったほうが良いな。

「わかった」

俺は翼を広げ再び飛ぶ。

オースは俺を狙うシャチャミーにクワガタの角で電撃を浴びせた。

俺は二階に上がり、ウヴァに向かって足を突き出す。

ウヴァはすぐ動いた。俺の蹴りは地面に刺さっただけだ。

「ウヴァ。いい加減お前の顔も見飽きた」

「奇遇だな、アंक。おれもだ」

ウヴァの拳を、横にずれて避ける。そのまま肘打ち。ウヴァは足をまっすぐ伸ばし蹴り返す。俺はそれを食らった。そのまま右手のクローで襲いかかるウヴァを翼で壁に叩きつけた。

「ぐっ」

今がチャンスだ。

「もらっぞ、お前のコア」

俺はウヴァに拳をぶつけるために走る。が、横から来た水流に俺は流された。

「間一髪だったわね、ウヴァ」

「メズール……」

メズールのやつ、てつきり高みの見物かと思ったがもう来たか。俺はメズールに炎を放とうとしたが、手を掴まれた。

「カザリ！」

俺の手を掴んだのはカザリだった。カザリは俺を下に投げ飛ばす。俺は再びシャチャミーに揉まれた。

「何度落ちれば気が済むのだ！」

再びオーズに助けられた。メダルを取られずに済んだとはいえ、屈辱だった。俺が何度も何度も地面に落とされるとは……。

「アंक、オーズ。ここで貴方達と決着をつけるわ」

「決着、つける」

ガメルもいる。グリード全員集合か。

「ヤミーで我らを消耗させるかと思ったが、自分から来るとはな」

「貴方達をそんな手で倒しても面白くないわ。メダルは私たちの手で直接奪う」

グリードは4人全員一階に降りた。

「さあ、来なさい。私の坊や達！」

4人のグリードにシャチャミーが集まっていく。ヤミーがセルメダルになりグリードに吸収される。

「やつら、セルメダルでパワーアップしたな」

「少々力が上がったくらいでは我らは倒せぬ」

「言ってくれるな、オーズ」

「でも、セルメダルの力を舐めないほうが良いよ」

「俺、元気出た」

「決着をつけましょう！」

4人のグリードは同時に攻撃を出す。俺たちはバラバラに避けることになった。

俺のもとにはウヴァとメズールが。

オーズのもとにはカザリとガメルが走る。

「アंक、メダルを取って貴方をバラバラにしてあげる」

「俺の苦しみを味わえ！」

メズールは水流、ウヴァは雷を放つ。それを側転でかわし、炎で反撃する。メズールは両手をあわせて防御した。

だが、ウヴァが空中から俺に襲いかかる。ウヴァの腕が俺を地面に叩きつけた。

オーズも激しい戦いだ。

ガメルにムチを叩きつけるが、ガメルの装甲に効果は見られない。
オーズは何度もムチを叩きつけるが、ガメルにはなんともない。

「俺、効かない！」

ガメルは体当たりでオーズを撥ね飛ばした。立ち上がったオーズを
カザリの爪が襲う。

「そろそろ僕のメダル、返してもらおうよ」

オーズはムチでカザリに反撃、カザリは距離を取ってかわす。
ガメルとカザリは衝撃波と竜巻でオーズを吹き飛ばした。

「ぬっっ……」

メズールの蹴り、ウヴァの爪で俺はオーズの近くに転ぶ。

「おい、マジでヤバいぞ」

「コンボを使う。時間を稼げ」

オーズはメダルを取っている。その動きにグリードが気がつかない
はずが無い。

「させるか！」

4人のグリードは走り出す。

「無茶言っ……な！」

4人も同時に相手をするのは無理だ。俺はメダルを入れたオーズを

階段の上に投げた。

オーズは着地の直後にメダルをスキャンした。

「クワガタ・カマキリ・バッタ！ガタガタキリバ・ガタキリバ！」

オーズの全身が緑に染まる。クワガタの角、カマキリの刃、バッタの脚。あれがウヴアのコンボか。

「俺のメダル……勝手に使うな！」

ウヴアが一人突っ走る。

ウヴアの爪がオーズに突き刺さるかに思われたが、オーズは2人に分かれてかわした。

「なんだ、これは！？」

ウヴアが爪を振り回す。オーズは更に2体増え4体になった。4体のオーズはウヴアをカマキリソードやキックで攻撃する。

「くっ、こいつ、どうなってる！？」

ウヴアが動揺している。どうやらガタキリバとやらは分身能力を持っているようだな。

ガタキリバはますます分身を増やし、グリードを襲う。俺は空中に退避した。地上にいたら身動きがとりづらくなる。オーズの余りの数にグリードは反撃も満足にできない。カマキリソードの刃が、角の雷撃が、強力なキックが、グリードにダメージを与えていく。

「こ、こいつ。きゃあー！」

オーズがカマキリソードでメズールを切り裂く。メダルが派手に飛び散り、コアメダルも飛び出した。
オーズは三枚のコアメダルを手にとった。

「貴様にはこれだ」

一体のオーズがメダジャリバーを取る。カマキリソードの刃が通りにくいガメルに対抗するためだ。2体のオーズが蹴りで動きを止めた隙にオーズはメダジャリバーを振り下ろす。ガメルの傷口からメダルが流れていく。オーズはそこを更に突き、コアメダルを出させた。ガメルからは二枚コアが抜けた。

コアが抜けたことでメズールとガメルは上半身の装甲が消失した。

「俺の体が……」

「私のメダルが……よくも……」

俺はウヴァにキックをぶちこむ。ウヴァの体からメダルが飛び出した。

「やったな」

一枚だが俺もコアメダル入手だ。少しぐらい貰っておかないとな。

「メズール、このままじゃ負ける。一旦逃げよう!」

「だがどこに!？」

「ここじゃないどこかよ!皆集まって!」

オーズの攻撃をかわし、なんとかグリードは一ヶ所に集まった。

「逃がすと思う……ぬうつ！」

オーズが一体に戻っていく。ヤバい、コンボの限界か!?

「やつめ！力が切れたようだぞ」

「作戦変更よ……やつを倒してメダルを」

「そうは行くかよ！」

俺は周りを炎で焼き尽くす。館はどんどん燃えていく。

俺はオーズを連れて離脱した。

館での戦いから数日が過ぎた。

オーズの体力が回復した後、俺たちはすぐに館に向かった。館は完全に燃えていて、中にいた人間も灰となっていた。だが、コアメダルは一つも見つけられなかった。グリードも館から脱出したらしい。俺とオーズはグリードを探し回ったが見つけることができないでいた。

ある日、オーズが妙なことを言い出した。城に戻ると。

「どうした？城が恋しくなってきたのか？」

「そうではない。思い出したのだよ、奴らの居場所を確実に調べられる方法をな」

グリードの居場所を確実に調べられる？

「一体どんな方法だ」

「アंकよ。空には無数の星が輝くな」

なんなんだ、いきなり……

「我らもまた星に住んでいる。我らの歩く大地は星の一部だ」

だからなんなんだ……

「その大地で起きたこと……我らの星で起きる全てを知りうる者がいる」

「なんなんだ、そいつは」

「地球の巫女というらしい。我らはそれを手に入れる」

俺たちの新しい目的が決まった。

館と悪魔と分身コンボ（後書き）

またヤミーの親が出ませんでした。出る間もなく死んでしまいました。

素直に三人称で書いていたら良かった気がしなくもありません。でもこの小説はこのまま多人数視点で書いていこうと思います。

最後にオースが妙なことを言いましたね。実はコアメダルにはちょっと独自設定が入っています。

それでテレビのコアメダルと特に違いが出ることはありません。

劇場版で明かされるかもしれないコアメダル誕生の秘密と矛盾が生まれる可能性があります。

それでもあえて書いてみたいと思います。

それでは次回の更新でお会いしましょう。

……ところでゴークアイジャーでボウケンジャー編、ゴークオンジャー編をやらない可能性があるかと聞きました。この戦隊は特に気に入っているので地味にシヨックです。

次回のゴークアイジャーで仲代先生には大活躍して欲しいです。

追記

6月21日、メズールがヤミーを作った経緯を追加。

メモリと一族と水中コンボ（前書き）

今回はシャウタコンボが登場。更にあのアイテムも登場します。

ぜひご覧ください。

メモリと一族と水中コンボ

俺はオーズと共に城へ向かっていた。地球の巫女……この地球で起きた全てを知る存在。そいつの居場所を知るやつが城にいるらしい。

「しかし、本当にそんなやついるのか？」

「いまいち信用できない。だいたいなんで城に巫女 of 場所を知るやつがいるんだ。」

「アंकよ。お前はコアメダルがどうやって作られたか、考えたことは無いか？」

「コアメダルがどうやって作られたか……考えたことが無いわけじゃない。色々考えたが、答えがわからない以上無駄だと思った。だから考えるのをやめていた。だが、今なら聞き出せるかもしれない。」

「お前が誰かに作らせたんじゃないか？」

「正解だ。私がお前たちを作らせた」

やはりな。世界の全てを望むほどの欲望だ。それを叶えるための力、求めないわけが無い。自分でコアメダルを集めているのも誰かに渡す気が無いからだろう。俺と今は協力関係だが、いつ俺のメダルを狙うか。こいつに警戒は怠れない。

「アंकよ。コアメダルは私が作らせた。その協力者に地球の巫女もいるのだ」

「なんだと？」

コアメダルを作るのに地球の巫女が協力した？そいつがいなきゃ俺たちは生まれなかったっていうのか。

「だが、そいつはなんでお前に協力したんだ？」

「それは城に行けばわかる。行くぞ」

オーズと俺は歩みを再開した。オーズがいなければ飛んでいくが、こいつがいないと話にならないだろうしな。全く面倒なことだ。そもそもグリード共がどこかに消えなければこんな苦勞をすることは無かったんだ。一体あいつらはどこに行ったんだ？

俺たちは城についた。ここに着くまで何事も無くて退屈なくらいだった。

城の人間どもがオーズを迎える。オーズはレイネを自分の部屋に呼ぶ用に言った後部屋に入った。俺も一緒に部屋で待つ。

「レイネ……そいつが地球の巫女について知っているのか？」

「そうだ。どうやら来たようだぞ」

足音が聞こえる。走っているのか、足音の感覚が短い。急いでいるみたいだな。ドアが豪快に開く。金髪の女が姿を見せた。俺は女に見覚えがあった。

（あいつ、あの時の……）

俺にメダジャリバーを渡した女だ。

肩で息をしている。相当走ったのだろう。

「王様……全ての……メダルが……集まったの？」
「嫌、まだだ」

オーズは事も無げに答えた。女……レイネのオーズを見る目が鋭くなる。

「……ならなんで戻ってきたのよ！」
「お前の……正確にはお前の知り合いの力が必要なのだよ」
「知り合い？……まさか……」

レイネはすぐに知り合いに思い至ったようだ。

「地球の巫女だよ」
「……無理よ。私は彼女と会えない」

レイネは首を横に振る。

「会えないだと。どういうことだ」

レイネはオーズから目をそらす。余り話したくない様子だ。だが、ここまで来て無駄骨は御免だ。なんとしても地球の巫女について聞き出してやる。

「おい、おまえ」

レイネが俺の方を向く。……おい、なんだ。今やっと気づいたかのようなその表情は。

「お前、いたの」

本当に気づいてなかったらしい。オーズしか目に入れて無かったのか。俺は少しイラついた。だが、今重要なのは地球の巫女について聞くことだ。俺は怒りを抑え、レイネに聞いた。

「お前、なんでそいつと会えないんだ」

「約束よ。全てのコアメダルが揃っていない状態では会えないのよ」

「一体誰との約束だ？地球の巫女とやらのか？」

レイネはすぐに否定した。

「違うわ。一族との約束」

「一族？」

オーズを見る。オーズは一族について語り始めた。

「地球の記憶を管理する一族……かつてレイネは私にそう名乗った。そして地球の記憶の力を提供する代わりに最強の力を生み出すと言ってきた」

最強の力……コアメダルのことだな。

「私はレイネが来る前に錬金術師達と手を組んでいた。その時点で力を秘めたメダルを作り出すことは決まっていた。そこにレイネが地球の記憶を持ってきたことで計画は飛躍的に進んだ。地球の記憶には我らが手にするどころか目にもすることも敵わぬ生物のデータが無数に存在した。その無数の記憶を種族に分類し、メダルに凝縮した。そして作られたのが」

「コアメダルってことか……」

膨大な生物の情報は地球の記憶からもたらされた。俺のメダルはタカ・クジャク・コンドルだが、他の鳥類の情報も俺は持っている。全ての鳥類がこの王国の近くにいないかは知らないが、簡単に入手できるものでも無いだろう。オーズの話が一番納得できそうだ。

「しかし、地球の記憶なんて持ち運びできるのか？」

「可能よ。私たちはその技術を作り出した。これがその技術の結晶」

レイネは妙な棒を取り出した。レイネの手に収まる棒は聞いたことも無いものだった。

「ガイアメモリ。地球の記憶を収めたアイテムよ」

そのアイテムはかなり小さい。地球の記憶はこんなものに入るほど少ないのか。俺は疑問をレイネにぶつけた。

「小さいからって甘く見ないことね。このメモリの中には膨大な記憶が入っている。人間に使えば、超人に変化させることが可能よ」

超人。そんなとんでもないことができるのか。

「俺たちにはこいつで運んだ情報が詰まっているのか」

「俺たち？ 一体何を言っているのよ。お前の中にコアメダルが入っているの？」

……しまった。こいつは俺の正体を知らなかったな。俺は何かごまかす方法を考えようとした。……なのに

「レイネよ。こいつはグリード。こいつの中には9枚コアメダルが入っている」

オーズがあっさりと俺の正体をばらした。

「何普通にばらしてるんだ！」

「隠すことでも無いだろう。レイネはグリードの存在も知っているからな」

だからってな。こいつも約束とやらでコアメダルを狙ってるんだろ。

「王様。なぜグリードと組んでいるのかしら」

目を細めて睨んできてるぞ、オーズ。

「この者と私の目的は同じ。だからだよ」

「……なるほどね」

レイネは納得したようだ。しかし、オーズは俺のコアを9枚と言っていたな。前の戦いで俺がウヴァから一枚奪ったのは知られていないようだ。できるだけばれないようにしないとな。

「コアメダルがどういう風に作られたかはわかった。だが、お前と一族の約束は何だ？」

「それは……」

レイネは黙り込んだ。相当言いたくないようだ。

「まさかその一族にコアメダルを使わせる気か？」

「違うわよ。そもそもお前が許しはしないでしょう。お前しかオースドライバーは使えないのだから」

「何？」

オースドライバーがこいつしか使えない？

「初耳だぞ」

「言ってなかったからな」

「……お前達、それくらい情報交換しておきなさいよ」

レイネは呆れていた。しかし、オースは本当に誰にも力を渡す気は無いんだな。

「オースドライバーの認証を解除する方法は私でさえ知らないわ。知っているのはドライバーを直接仕上げたガラくらいでしょうね」

ガラ……錬金術師の名前か。

「後は私だな。それで一族との約束は？」

レイネは窓の外を見始めた。本気でしらばつくれるつもりか。

「風は良いわね」

などと言うレイネの首にオースはメダジャリバーを向けた。物騒なやつだ。さつさと話を聞きたいのは俺も同じだが、もっと手があるだろうに。

「さつさと言え。さもなくば貴様の首は大地に落ちるぞ」

「野蛮なやつね。こんな方法で話を聞こうだなんて……」

オースも問題だが、おまえの態度にも問題があると思うぞ。

「なんとも言え。私はこのような所で立ち止まるつもりは無い。

世界を我が掌中に納める野望……それを叶えるまではな」

「……わかったわよ。話してあげるわ」

レイネは約束の内容を話し始めた。

「ある時、地球の巫女が地球の声を聞いたわ。内容は巫女によると『未来に大いなる災いが全ての命を滅ぼす』とのことだった。一族は災いに対抗する手段を考えた。しかし、そもそも災いが何なのかわからない。巫女は再び地球の声を聞こうとしたけど地球は答えてくれなかった。一族はせめて災いに対抗できる最強の力を求めることにした」

「それでコアメダルを作ったのか？」

俺の質問にレイネは首を横に振った。

「違うわ。災いに対抗するために一族が考えた最初の方法は全人類を超人に進化させることだった」

全人類を超人に！？なんて滅茶苦茶な連中だ。

レイネは話を続ける。

「その計画はガイアインパクトと名付けられたわ。でも地球の巫女はその計画に反対した。彼女は人類も含め、全ての命を守るべきだ

と考えた。だから、代わりの計画を考えた。ガイアメモリを越える力を持つ地球最大の守護者を作り上げることを！」

地球最大の守護者……それがオーズということか。偉くともない話になってきた。

「そうか。そのためにお前は私に協力したということか」

「そうよ。私と巫女の計画通り、ガイアメモリを上回る力を持つコアメダルが完成した。……でも誤算があった」

レイネは俺を睨んだ。

「まさかコアメダルが自我を持つとは思っていなかったわ」

「悪かったな、勝手に動き出して」

悪かったな、と言ったが俺は悪いだなんて考えていなかった。誤算であれ何であれ、俺たちは自分の意思を持ったのだ。俺は好きにやるだけだ。

「落ち着け。レイネ、話を続けよ」

オーズはマイペースを保ったままだ。

レイネは話続けた。

「コアメダルがグリッドになったことを一族はすぐに察知したわ。全てのコアメダルを回収しなければ一族には戻れない。奴らは一方的に私に言ってきたわ」

「それが約束か」

しかし、なんとも壮大な秘密が隠されていたものだ。地球を守護す

るためにコアメダルが生み出されたとはな。人間どものことなど知ったことかと言いたいところだが……仮に人間が絶滅すればセルメダルを集められなくなる。セルメダルを補給できなくなれば俺たちグリードはいずれ体を保てなくなる。それに、その災いとやらに俺たちのコアが破壊される可能性もあるな。本当にその災いが来たら戦わざるを得ないか……

「しかしだ。そうなるとこいつが地球最大の守護者ってことか？」

オーズは守護者って柄じゃないだろ。どっちかって言うつと破壊者だ。そもそもこいつが何かを守ること事態想像できない。

「今はそうね。でも、今のオーズが生きている間に災いが来るとは限らないわ」

「……今のオーズが生きている間に災いが来なかったらどうするんだ？」

「次のオーズ」

レイネはあっさり言った。俺はもう少し質問を続けることにした。

「次のオーズが生きている間に来なかったら？」

「また次のオーズ」

……ずいぶんと他力本願な計画だな。だいたい地球よ。いつ来るんだ、災いは？未来らしいが具体的にいつ来るんだ。せめてそれくらい教えとけよ。

「一族とやらの約束はわかった」

オーズ、お前は何か感想は無いのか。一応お前が地球最大の守護者

らしいぞ。何か言いたいことは無いのか。

「ならばレイネよ。一族を滅ぼせばよいだけではないか」

オーズはガイアインパクトを潰す方法を提案した。お前はまたそれか。確かに簡単な話だが……こいつは殺すことしか頭に無いのか？俺はこいつの王国の未来が真剣に心配だ。

「何を言っているのよ……」

「簡単な話だ。一族が消えればガイアインパクトを起こす者は消える。もはや心配は無用というわけだ」

そこは俺もオーズに賛成だ。超人がどれほどのものが知らないが、そんなのがいたら俺達が動きづらくなる可能性がある。さつさと潰して、ゆっくりメダル集めをしたい。

「私に仲間を殺せというの？」

「既に一族はお前を仲間と見なしていないでは無いか。お前がおらぬ間にガイアインパクトを起こすこともあり得る」

「そんな……まさか……」

レイネは信じられないという顔をしている。だが、オーズの言う通りだ。ガイアインパクトに反対していたのはレイネと地球の巫女ぐらい。なら、多人数でガイアインパクトを強行することは十分考えられる。

「お前がいかねば、お前と巫女の計画は破綻する。全てはお前の決断だ」

「私の……決断」

レイネは顔を上げて言った。
明日まで考えさせて欲しい。

一日なんてあつという間だ。すぐに朝が来た。
レイネは決断した。かつての仲間を倒し、巫女を助けることを。

本当に迷いを振り切れたかはわからない。だが、重要なのは一族の場所だ。そこがわかれば、後はオーズと俺で十分だ。

俺たちはすぐに出発した。

レイネによると王国の西の洞窟に一族は住んでいるらしい。

俺たちは西に向かって進んだ。何も無く進めるかと思ったがそうはいかなかった。道中にあつた森の中の湖で俺たちは怪しいやつに遭遇した。

黒いローブを着た人間。被っていたフードを下ろし、素顔を見せた。黒髪に赤い目の男だ。俺とオーズを一瞥した後、鋭い目でレイネを見る。

「バルディ！お前、どうしてここに……」

どうやらレイネの知合いらしい。

「それはこちらのセリフだ。レイネ、どこへ行くつもりだ」

「……一族の洞窟に」

「全てのコアメダルは集められたのか」

こいつ一族とやらの仲間か？だがもちろん俺達はまだメダルを集め終わっていない。

「いえ、まだよ」

「ならばお前に我らのもとに戻る資格は無い！即刻立ち去れ！」

レイネに対して攻撃的な物言いだ。確かにこれじゃ戻りたくないのもわかるな。

「立ち去るつもりは無い」

オーズが前に出る。バルディとかいうやつは不機嫌な顔になった。

「誰だ貴様」

「我が名はオーズ。貴様達から地球の巫女を奪う者だ」

オーズははっきり言った。宣戦布告だ。

「何だと！？レイネ！」

「その男の言う通りよ。私は地球の巫女を奪い返しに来た」

バルディはオーズから離れると細い棒を取り出した。ガイアメモリだ。

「地球の巫女を奪うなど誰が許すか！」

『B I R D！』

男はメモリを右手の手のひらに入れた。男の姿が変わっていく。体毛は緑色。緑色の羽根が肩から生えている。頭は鳥の顔をしている

が、その下に更に口があった。

こいつが超人？どうみても怪物じゃないか。

「貴様らを殺す！」

鳥の怪物は俺たちに羽を手裏剣のように飛ばしてきた。俺たちはバラバラにそれを避ける。

「ふん。やはりこうなったか」

「やるしか無いみたいね」

レイネはガイアメモリを取り出した。

『N A S C A！』

「行くぞ！」

オーズは既にメダルのセットを完了していた。

「変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ！』

オーズはメダルをスキャンし変身を完了。

レイネはメモリを左手の手首に挿す。

レイネの姿は青い体色の騎士に変わった。首にはマントのように摩く二本のマフラーがある。

こちらの方が超人と言った感じだな。

俺も変身した。

これで三対一。一人で向かって来るとはバカなやつだな。バルデイは空を飛んでいるが、俺は空を飛べる。さらにレイネも奇妙な模様の光の翼を広げ飛ぶ。オーズは空を飛べないが俺たちだけで十分だ。

俺は既に勝利を確信した。だが、湖の中から何かが飛んできた。

「なんだ!？」

「歯か……」

オーズは何かを掴めたようだ。確かにそれが歯の形をしているのが見えた。

「歯!？」

「まさか……アノマロカリスのメモリ……」

アノマロカリス?聞きなれない名前だ。

「なんだそりゃ?」

「水中に住んでいた古代生物よ。湖から攻撃しているんだわ」

湖か。俺の炎じゃ攻撃しづらいな。オーズに頼るしかないか。

『シャチ・ゴリラ・タコ!』

オーズはメダルを変えていた。黄色い目を輝かせる暗い青色の頭。白色の手甲で覆われた腕。吸盤のついた水色の脚。

前の戦いでメズールとガメルから奪ったメダルか。オーズは湖を泳ぎ、歯の射出源に近づいていく。 射出源から白色

の怪物が現れた。比較的虫に似ている気がするが、なんとも奇妙な怪物だ。昔はあんな生き物が住んでいたのか。

オーズは怪物を拳で殴る。大型の手甲は見た目通りパワーに優れているようだ。重い一撃がアノマロカリスの体力を確実に奪っている。アノマロカリスにオーズは優位に立った。だが、オーズの背後から新たなアノマロカリスが現れ、オーズを羽交い締めする。

「弟よ、やれ！」

あいつら兄弟か。兄弟揃って同じメモリを使うとはな。だが、オーズがピンチだ。動けないオーズは何度も殴られている。しょうがない。助けに行くか。

「レイネ、そいつは任せたぞ」

「お前、さっきから私に任せっきりじゃない！」

レイネが何か言った気がするが、気のせいだろう。レイネが剣をバルディの爪と合わせている間に俺は湖へ向かう。

オーズは何度もアノマロカリスの拳を食らっていた。体を抑えられて反撃できない。

「良いぞ、弟！止めをさせ！」

おれはオーズを羽交い絞めしているやつの背中に炎を放った。

「ぐああ！」

オーズはアノマロカリスが怯んだ隙に脱出した。そして前方のアノマロカリスを殴り飛ばす。

「お前、よくも！」

俺からダメージを受けたアノマロカリスが歯を飛ばしてきた。俺は軽くかわしていく。

オーズがそのアノマロカリスに向けて手甲を発射した。あの手甲、飛ばせるのか。手甲は水しぶきを飛ばしながら、アノマロカリスに走った。アノマロカリスは爆発して、姿が見えなくなった。

「兄貴！よくも兄貴を！うおおー！！」

アノマロカリスが変貌していく。動物のような姿になり、巨大化した。アノマロカリスはオーズをくわえ、湖に潜行する。

「オーズ！」

オーズの姿が湖に消えた。

ooo side

変貌したアノマロカリスごと私は湖に沈んだ。変身の影響で呼吸は余り問題無い。だが、水中では水圧で動きが鈍る。このままでは不利だ。私はアノマロカリスから脱出しようとする顔をする。

アノマロカリスは激しく動き回り、私を苦しめる。だが私の拳に耐えきれず、アノマロカリスは私を離れた。

私はすぐに水上に上がりメダルを交換。メダルをスキャンした。

『シャチ・ウナギ・タコ！シャシャシャウタ・シャシャシャウタ！』

歌と共に私の腕がウナギの力を持つものになった。水棲系生物のグリード・メズールのコンボだ。

湖から顔を見せたアノマロカリスが歯を連射してくる。私は体を液化させ、湖に入った。

アノマロカリスも湖に入るがもはや立場は変わっている。コンボを使った私の水中戦能力は飛躍的に向上していた。もはや水の中に私の敵はいない。そう豪語できるほどの自信を感じる。

私は接近して脚の触手を解放した。触手は私の手足のように働き、アノマロカリスにパンチを行う。パンチの連打にアノマロカリスは怯んだ。

湖から出ていこうとするアノマロカリスの背中に私は触手で張り付く。

更に電気ムチでアノマロカリスの動きをコントロールし、地面に落とした。

私は大地に立つとメダルをスキャンした。

『スキヤニングチャージ！』

私は体を液化させ飛び上がる。アノマロカリスに電気ムチを巻き付け、引き寄せる。脚の触手を収束させ、アノマロカリスの体を貫いた。

side out

オーズがアノマロカリスを倒した。あれがメズールのコンボか。水

を操る能力を持つただけはある。水中戦は得意みたいだな。
レイネとバルディの決着も近づきつつあった。

「バカな、アノマロカリスがやられるなど!」

「あれがコアメダルの力よ。私たちも決着をつけましょう」

「レイネエエエ!」

バルディは羽手裏剣を乱れ撃つ。

「超高速!」

レイネは一瞬でバルディの背中に回った。俺は何が起こったかわからなかった。バルディも同じだっただろう。

バルディが背中を向こうとした時、レイネは既に翼を切り落としていた。

飛ぶ力を失ったバルディは落下する。

「さようなら」

レイネは指先から青いエネルギー球を発生させた。数個のエネルギー球がバルディの体に落とされる。

爆発の後には、緑の羽が散っていただけだった。

高速移動にエネルギー球、レイネの変身する超人はかなりの力を持っているようだ。負ける気はしないが敵に回すと面倒かもしれないな。

俺とレイネは地面に降りて人間の姿に戻った。
オーズも変身を解いているが、何かを見ている。

「なんだ？」

俺とレイネはオーズに近づいた。オーズが見ていたものの正体は人間だった。横にガイアメモリが落ちている。

こいつはさっきまでアノマロカリスになっていたやつなのか。それなら なぜ人間に戻っている？

「オーズ。倒したんじゃないのか？」

「わからん。私はこいつを確かに貫いた。だが、こいつは生きている。レイネ、理由はわかるか」

レイネは男の体を触っている。何か異常が無いのか調べているようだ。ふいに壊れたガイアメモリを手に取った。

「……信じがたい話だけど、オーズにはメモリを破壊する能力があるようね」

「何？」

「メモリだけが破壊されたからこの男は無事だったのよ」

ガイアメモリだけを破壊する機能は珍しいようだ。先ほどレイネが倒した時は敵は消えていた。普通の超人にはそんな真似はできないのだろう。

「だが何故オーズにそんな力が？」

「わからないわ。コアメダルが地球の記憶を持つことと関連があるかも知れないけど」

レイネが推測を述べているとオーズが動いた。男の手を持ち上げ、湖に放り投げた。

「お前、なんてことを！」

レイネがオーズに詰め寄る。

「オーズにメモリを破壊する能力がある。それだけわかれば十分だ。もうやつに価値は無い」

「だからって……気絶している人間を平気で……」

「お前はやつらと袂を別つことを決めたのだろう？ならば良いではないか」

オーズはなんともないことのように言う。レイネはオーズに何も言い返さない。ただ呆然と男の沈んだ湖を見る。

「それに兄弟とともに死ねたのだ。やつらも幸せだろう」

オーズは上機嫌だ。レイネの悲痛な顔とは対称的だった。

レイネが裏切ることを決めたにも関わらず、なぜ敵の死を悲しんでいるかはわからない。俺はグリードを裏切った特別に悲しみを覚えなかった。それがグリードと人間の違いではないかと俺は感じた。

メモリと一族と水中コンボ（後書き）

皆さん楽しんでいただけたでしょうか。

この作品はコアメダルの誕生にガイアメモリが絡んでることにしました。

経緯を纏めると

一族が地球の危機を知る↓ガイアインパクトを起こそうとするが地球の巫女とレイネが反対↓レイネが力を求めるオーズを発見。協力してコアメダルを作成する。↓メダルがグリード化。一族がそのことを知り、レイネは一族に戻れなくなる。↓オーズが自らメダル回収に向かう。

こんな感じです。

オーズとWには何か繋がり（財団X以外で）があるのではと思い、この設定を思いつきました。

この設定なら紫のメダルもある程度説明がつくと思いますので。

映画で明かされるコアメダルの秘密と矛盾が出るかもしれませんが……。

では気になることがありましたらご意見ご感想にお書きください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7249s/>

仮面ライダーオース 世界の全てを望んだ者

2011年10月8日23時58分発行